菊島隆三シナリオ選集 II

菊島隆三シナリオ選集Ⅱ

昭和五十九年五月二十一日第一刷印刷
昭和五十九年五月三十一日第一刷発行

定価一八〇〇円

著者　菊島隆三
発行者　荻洲照之
印刷所　精興社
製本所　牧製本
発行所　㈱サンレニティ
東京都渋谷区広尾五―四―一一―七A―一
電話〇三―四四二―〇八一二　〒一五〇
発売所　星雲社
東京都千代田区神田錦町三―六
電話〇三―二九四―五八一八　〒一〇一

© R. Kikushima, Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取り替え致します（制作＝希望社）

ISBN 4-7952-3754-9　C 0374

菊島隆三シナリオ選集 II

発行＝㈱サンレニティ
発売＝星雲社
定価＝一八〇〇円

ISBN4-7952-3754-9 C0374 ¥1800E

菊島隆三シナリオ選集 II

Sanrenity

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和32～33年頃（竹本和夫氏撮影）

目次

女侠一代……9
悪女の季節……61
汚れた手……115
女が階段を上る時……171
からっ風野郎……229
白い崖……273
筑豊の子どもたち……329
花影……383
ある日本人……431
解説　白井佳夫……487

装幀　保坂延彦

女侠一代

◀1958年（昭33）松竹作品▶

監督　内川清一郎

主な配役

ギン……清川虹子
与一郎……田中春男
お幸……淡路恵子
紋二……北上弥太郎
幸次……森美樹
お咲……瑳峨三智子
吉田……三国連太郎
堂島……須賀不二夫
市造……戸上城太郎
寅松……近衛十四郎
お島……山田五十鈴

原作　火野葦平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

（F・I）筑豊炭田の遠景

遠賀川の流域を岡蒸汽が白い煙を吐いて行く。

画上タイトル浮ぶ。

明治二十四年夏―九州筑豊地方

2

唐戸橋近く

人夫とレール、材木などの資材を満載した岡蒸汽が走って来る。急にけたたましく汽笛が鳴り、ガクンと急停車する。その反動で人夫たちがひっくり返る。前方を見て眼を丸くしている機関手。そのわけである。前方のレールの上に大きな石の地蔵が横倒しに置いてある。

「畜生ッ川舟の野郎共じゃな！」

鉄道人夫たち、口々に叫びながら貨車から飛び降りて地蔵を取り除こうとすると、その先の唐戸鉄橋の足場が見事にぶっ倒されている。

間髪を入れず遠賀川の堤下から、「ウオッ!!」というかん声があがる。

竹槍、コン棒、日本刀などを手にした川舟船頭がおよそ四、五百人、堤を駆け上がってくる。これも四、五百人の鉄道人夫がツルハシをかざして迎えうつ。

川舟船頭たち、材木をとり、レールを外し連結のトロッコなどを倒す。

その入り乱れての凄まじい乱闘をバックに題名、スタッフ、キャストのタイトルが流れる。

（F・O）

3

筑豊炭田

その採炭風景。

解説の声「幕末から明治にかけて、日本有数の炭田が筑豊地方に開発され、川筋と呼ばれた遠賀川流域一帯は異常な活況を呈していた」

4

直方の稲荷町附近

ツルハシへ振分け荷物をつけた炭坑夫、人足、川舟船頭などの通行がはげしい。どれもこれもドスを呑んでるのが一眼で分かるような連中だ。それどころか大っぴらに日本刀を腰にぶちこんでなぐり込みにでも行く一隊も通る。

解説の声「したがってこの流域を目ざして諸国から風来坊、無頼漢、前科者等が集まった。坑夫のほとんどは偽名で、なかには国定忠治、木下藤吉郎、雷電為右衛門などと名乗るものもいた！」

5

直方の川勘場

石炭が川舟に積み込まれる。

解説の声「掘り出された石炭は叺（かます）に詰められ、馬の背に積まれて川岸まで来ると、川舟によって遠賀川を降った。川舟なくして石炭はどこにも運搬することは出来なかった」

6　遠賀川を下る川舟

石炭を積んだ川舟が下って行く。

解説の声「この流域には何時とはなしに川筋気質という一種仁侠の気風が生じ、多くの親分が輩出した。そして連日喧嘩三昧、さながら無警察状態を呈していた。そしてそれが頂点に達したのは、この川舟による石炭の運搬が、鉄道に代ろうとした時期であった。鉄道の出現は彼ら川舟船頭にとって生活権を失う大問題であったからである。彼らは生命を賭して鉄道敷設に反対し、必死の抵抗を繰り返した」

7　鉄道敷設現場

唐戸橋の鉄橋架設現場。レールはひん曲げられ、材木は焼かれ、鉄橋の足場はこわされ、落花狼藉の跡。

解説の声「そしてその争いはこの唐戸橋の架設にすべてが賭けられていた」

8　遠賀川の流れ

石炭をつんだ川舟が行く。

勝ち誇ったように舟頭がいい声で唄って行く。

〽川舟船頭衆には
どこみて惚れた
堀川通いのさらしベコ

9　唐戸橋近くの現場事務所の前

怪我をした権藤組の鉄道人夫たちが、ツルハシやコン棒をもっていきまいている。

権藤組と染め抜いた半纏を着た小頭風の男国本市造とその手下音吉がとめている。

市造「待て待て！　殴り込みをかけたところで工事が進むわけじゃねえ。それどころか割り込みの多いこの工事だ。下手に騒ぎ立てると外されるかも知れねえぞ」

音吉「（尻馬に乗って）そうしたらお前たちは食上げじゃねえか。それどころか親分衆は若松の本部へ呼びつけられて油をしぼられとるんだ」

10　若松の鉄道工事本部・応接室

権藤組の親分権藤はじめ、堂島、根津、浦川、鬼熊等各組の親分が、自分の組の名を染めた半纏を着て居並んでいる。汽車課長補佐の佐野が威張りくさって、

「ええ、君、この工事は唐戸の鉄橋がいつ完成するか、ただそれだけにかかっているんだよ！　いわば唐戸鉄橋の完成が工事の山だ。それを君、こんな状態じゃ何時出来るか見当もつかんじゃないか。（と、地図を指し）直方から若松まで一体何里あると思ってるんだ。それに、単線が開通すればすぐに複線の工事にかからなけりゃならん。こんなことでは課長もわしも腹を切らにゃならん」

権藤「しかし……」

と、いいかけた時、奥の部屋からドイツ人の技師、ルイ・ガーランドとカール・ジュエンシングが出て

来る。
ルイ・ガーランド、権藤をちらっと見て
「コンナヤバンナトコシリマセン。セキニンモテマセン」
と、肩をすくめて去る。
佐野、困ったように扉の方を振り返る。
汽車課長川上が不機嫌に出てくる。
佐野「課長、あの二人は？」
川上「こんな殺伐なとこで仕事は出来んと辞表を出してったんじゃ。泣き面に蜂だ。（と親分衆へ）君等、何か手はないのか」
権藤「これだけは鉄道院の方で手を打って貰わんと」
川上「警察か」
権藤「警察ですむならわしらの方でやります」
川上「じゃなんだ？」
権藤「軍隊です」
川上「軍隊？　バカ云うなッ、畏れ多くも陛下の軍隊をこんなことで使えるか！　お前の組は今日から鉄橋工事をやめさせる！」
権藤「課長さん！」
川上「（それには答えず）誰か船頭共を抑える者おらんのか」
鬼熊組の半纏を着た大男が一歩出る。
鬼熊「わしは若松側をやっとるので、出しゃばるようじゃが、一つやらして貰いましょうか」
権藤「（睨む）」
鬼熊「（睨み返して）ハックショイ!!」
と、豪快なるクシャミをして一同を吹き飛ばす。

11　堀川の運河（夜）

石炭を満載した川舟がひしめいて泊っている。
その一艘――ガンガン七輪にお手のものの石炭を燃やして酒の燗と明かりの代用とし、積んである石炭を平にして、その上に藁莚を敷き船頭たちが、「三ツヅ」バクチの真最中である。
船頭鶴三「見やがれ。天一、五、五、一と出やがった。（と場金をかき集めながら）鬼熊が出ようが誰が出ようが船頭衆に歯が立つかい、ウフフ」
船頭仙吉「岡蒸汽に頭の上をシュシュ走られちゃ末代までの名折じゃ……そら張った」
船頭文六「よし来た。（と張って）鉄橋の下を帆を下ろして船頭さまが通れるかってんだ」
その時、
「そうもいかねえだろう」と、いう声。
船頭たち、声の方を見る。
船頭鶴三「誰じゃ？　妙なことをいう奴は？」
「俺じゃよ」
と、隣りの舟で石炭の火で鶏を焼いていた男が振り返る。
船頭仙吉「吉田じゃねえか。おめえ岡蒸汽の肩もつ気か」
吉田と呼ばれた男、顔色一つ変えず、
「別に肩もちゃせんよ」

船頭仙吉「じゃ何だ」
吉田「俺アどういうもんか岡蒸汽ばかり眼の敵にする気がせんとじゃ」
船頭仙吉「何だと！」
吉田「理屈はない。どうころんでも勝てん相手にゃ勝てんちゅう話さ」
船頭仙吉「手前鉄道からゼニでも貰ったのか」
吉田「まるで気違い犬じゃな」
船頭仙吉「なに、この野郎ッ」
と、なぐりかかるが、吉田に体をかわされて河へ飛び込んでしまう。
吉田「危ねえ。大丈夫か……すまんことをしたな」
この男どこまでも素っとぼけている。
（WIPE）

12　唐戸橋の工事現場

鬼熊組の人夫たちが丸太の仮橋をかけている。
急に一人の人夫が声をあげる。
人夫一「おーい。変なものが流れて来たぞォ」
人夫たち、上流を見る。
筏のようなものが流れて来る。
人夫二「簀巻だ！」
と、川へとびこんで筏の方へ泳ぐ。
人夫一「誰の簀巻だア」
人夫二、筏に泳ぎついて驚く。
筏に乗せられた簀巻に［鬼熊大五郎］と書いた札が差してある。
人夫二「うちの親分だア!!」
足場にいた人夫たち、たまげた拍子に二、三人が足を滑らせて川へ落ちる。
（WIPE）

13　若松の本部事務所・応接室

当惑顔で腕を組んだまま往ったり来たりしている川上汽車課長。
それを見守っている佐野、ハレ物にさわるように伺いを立てる。
佐野「あの……」
川上「何じゃ？」
佐野「あと一つ考えがあるんですが」
川上「いうてみい」
佐野「皆木組は如何でしょう」
川上「皆木組？　持場はどこだ」
佐野「まだ小さい組ですが、持場は別に……なんなら、そこへ呼んで置きましたので」
川上「（うなずく）」
佐野「（入口の方の扉をあけ）皆木組」
と、呼ぶ。
見るからに好人物らしい皆木与一郎が乾分の紋二を連れて入って来る。
皆木「与一郎と申します。（と一礼して紋二をさし）乾分の紋二です」

紋二「何分よろしく」
二人共およそ人夫請負らしからぬ頼りない感じである。
川上「(佐野に)何かの間違いじゃないのか」
佐野「いいえ」
川上「(くさって)溺れるものは藁のたとえか……いまどこやっとる?」
皆木「はい。草むしりの方をやらしてもらっております」
川上「なに(と気色ばむが)ハハハ、君は草むしりぐらいが性に合っとる」
皆木「いえ。やるのはわしではないんです。家内が……」
川上「家内?」
紋二「はい。皆木組の仕事は姐さんが全部……」
皆木「おめえは黙ってろ……家内は島村ギンと申します」
川上「島村というと?」
皆木「はい。内縁の家内でして……山口の田舎におりました時分、岡蒸汽の錦絵を見たのが病みつきで、これが一生の仕事じゃと家飛び出して来た奴でございます」
川上「フム」
皆木「どうかこの機会に何分……」
川上「しかし君……」
佐野「課長(と、割って入り)そのギンについてはこんな話があるんです……つい先々月でしたか、若松で沖仲士同士の大喧嘩があったでしょう。あの時仲裁に立ったのがこちらのギンさんなんです」
川上「(本当にせず)女がどんな仲裁をしたんだ」
佐野「それが、あの斬合の真只中へ素ッ裸で飛びこんで」
川上「素ッ裸!?」
佐野「ええ! 流石の命知らずの連中も度肝を抜かれてとうとう喧嘩はウヤムヤ……」
皆木「あのオ……」
佐野「なんだ?」
皆木「素ッ裸ちうても、腰巻だけはしとりました」
川上と佐野、顔を見合せる。

(WIPE)

14 遠賀川の流れ

川舟が下って来る。前にバクチをしていた鶴三、仙吉、文六の連中である。
鶴三「(前方を見て)おい。また鉄橋の足場を組んどるぞ」
仙吉「性こりもねえ人足共じゃ。叩っこわせ!!」
船頭たちかん声をあげて近づく。
その先に新しくかけられた唐戸橋の足場が見え、二十人ほどの頬冠りした人夫が動いている。

15 唐戸橋の足場の上

足場の下へ集結した船頭たちが足場を見上げて声をかける。
「やい。人足共、そこをどかんと丸太ごと土左衛門だぞ」
「何じゃと」
と、皆木組の半纏を着た一人が頬冠りをとる。なんとその下は大丸髷である。大きな眼、ボリュームの

ある格幅、皆木組の女親分島村ギンである。
鶴三「ウワッ、女じゃ!!」
ギン「女だからどうしたんじゃ」
と、ニッと笑うと手をあげて人夫たちに合図する。
人夫たち、一せいに頬冠りをとる。これがみんな女衆である。
船頭たち、たまげる。
ギン「(機を逃さず)あんたら何しとるんじゃ。女子のおる下へ集って、のぞいとるのか」
船頭たち、喰われる。
鶴三「そんなもんのぞくか」
ギン「じゃ、女子を相手に喧嘩に来たのか。川筋気質(かたぎ)も落ちたものじゃ」
文六「女は相手にならん。男を出せ!」
ギン「船頭衆や。まあ、そのコン棒を納めてくれや。……水と岡とは違っても、お互いに寸のつまった半纏を着て稼ぐ同士じゃ。生れた時から仇同士でもないじゃないか」
船頭「それがどうしたんじゃ!!」
ギン「お互いに仲よくしようじゃないか。早い話があんたら船頭衆の憎いのはワシ達じゃなくて鉄道院じゃないか。いい分があったらそっちへいうのが筋道じゃ。ワシ達は雇われて働いているだけじゃ。働かんと食えんからな」
鶴三「うめえこというな。婆さん」
ギン「婆さんじゃないばい。やっと三十に手が届いたばかりじゃ。それより、あんたら男だったら、男らしく一番勝負と出たらどうじゃ」
文六「何の勝負だ?」
ギン「石炭の運びっこじゃ。岡蒸汽か舟か、どっちが余計運ぶか勝負したらどうじゃ、というんじゃ」
鶴三「川舟は一万艘あるんじゃ、岡蒸汽なんか屁でもないわ」
ギン「その意気じゃったら、女子など相手にしないで早よう下るがええ」
鶴三「だまされんぞ。ハハハよし。今日はおめえに免じてかんべんしてやる。そのかわり、そこで逆立ちを一つして見ろ、そうしたら今日は見逃してやるわ」
ギン、さすがに困る。女人夫たちもギンの方を心配そうに見る。いやもっと心配しているのは岡の上で様子を見ていた与一郎である。
鶴三「どうした、出来んのか」
ギン「なあに、よく見とれ。これでも子供の時は軽業のギンといわれたもんじゃ」
と、足場のせまい板の上でいきなり逆立ちする。
「よう。ええぞええぞ」
と、船頭たちははやしたてる。
ギン、やっと体を元に戻すが、調子に乗って、
「どうじゃ、何回でもやったるで」
と、また逆立ちするが、今度はいけない。直逆さまに川の中へ落ちる。
与一郎が蒼くなって飛んで来て叫ぶ。
与一郎「誰か、誰か助けてくれ。ギンは金槌(かなづち)じゃ!」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com